

孟法師碑を科学する（二）

―初唐三大家との筆意考証と日本近代大家臨書の一考察―

内田 征志

目次

準備

本論

〔第一章〕

書法編・「孟法師碑」からの筆意考証〈孟法師碑を科学する（一）〉の続き

（6）、「跳ね」の研究

（7）、「散水」の研究

（8）、「転接部分」の研究

〔第二章〕

「孟法師碑」と初唐の三大家（虞世南「孔子廟堂碑」・欧陽詢「九成宮醴泉銘」）との文字比較考証

〔第三章〕

日本近代大家臨書考察

結語

註

参考文献

準備(論文を読むための既存の基礎知識など)

「1」、時代背景

褚遂良の生卒は、(AC五九六～六五七)なので、隋時代(五八一～六一八)から初唐時代(六一八～七一二)を生きた人物である。五八一年、楊堅が北周の皇帝靜帝より帝位を受け隋王朝を建てた。初代文帝の誕生である。その後次第に勢力を伸ばし、南朝の陳を滅ぼし天下統一をし(五八九)、都を大興(西安)に置く。隋王朝二代目煬帝は、洛陽に遷都する。実父を殺害して帝位についたのは有名な話である。煬帝の悪政は、無理が無理をともない、謀反により殺されてしまう。その後、三十七年で隋王朝は滅びてしまう。隋王朝末期の混乱を高祖(李淵)が統一し、唐王朝を建てた。その後、太宗(李世民)が父の後を受け継ぎ隆盛の国家をつくる。

「2」、褚遂良の人物像

褚遂良(AC五九六～六五七)は、杭州錢塘(現在の浙江省杭州市)の出身。字は登善。初唐三大家の一人。歐陽詢(五五七～六四一)・虞世南(五五八～六三八)と共に六〇歳前後で唐時代に入った先輩たちの中で、二〇歳を過ぎたばかりの褚は

確実に仕事をこなしていく。曾祖父の褚豪は、梁国の太子中書、祖父の褚玠は陳国の秘書監。代々、要職につく家柄である。父の褚亮は、陳国の禎明初め（五八六頃）尚書殿中侍郎を勤め、書の鑑定にも優れていた。隋時代に入り、大業年間に太常博士を授けたが、上奏して宗廟を改置することに反対したため、西海軍司戸に左遷された。薛挙が建国すると黄門侍郎を授かる。太宗は、褚亮が優秀な人物であることを知り、薛挙が破れると、すぐに迎え入れた。褚遂良は、大業年間の末、父に従って隴右におり、薛挙に通事舎人を授けられた。薛挙が破れると、父と共に唐に入り、秦州都督府鎧曹参軍を授けられた。彼は、博学で、書も大変すぐれていた。そのようなこともあり、父の友人でもある歐陽詢は大変、彼を大事にした。『貞観政要』全一〇巻四〇編。唐の呉兢（六七〇～七四九）の著作では、貞観一〇年（六三六）、太宗は侍中の魏徵に、「虞世南の死後、書を語る者がいなくなった」と嘆くと、魏徵が、「褚遂良は筆を下すこと適勁、誠に良く王羲之の体を得ています」と答えたので、即日、召されて侍書とした。そして秘書郎から起居郎に遷された。貞観一三年（六三九）、太宗は御府の予算をねん出し、王羲之の書をかたっぱしから集めた。全国から争って古書が集まったが、それを鑑定できる者がいなかった。遂良は、ほとんど間違いなくその出所までくまなく論じたという。貞観一五年（六四一）、諫議大夫に遷され起居郎と兼ね司った。貞観一八年（六四四）には黄門侍郎として朝政に参与した。太宗には、数多くの名臣・良将が仕えたが、褚遂良ほど気骨のある家臣はいなかった、と伝わる。貞観二〇年（六四六）銀青光祿大夫を加授されたが、翌年、父の喪に服した。貞観二二年（六四八）、再び旧職に復し、さらに中書令を拝した。高宗が即位するに及んで、尚書右僕射となり、河南県公に封ぜられ、褚河南とも称された。永徽元年（六五〇）、河南郡公に進められるが、後、同州刺史に左遷される。永徽三年（六五二）、召されて吏部尚書・同中書門下三品・監修国史を拝し、光祿大夫を加えられ、また太子賓客を兼ねた。永徽四年、張行成に代わり尚書右僕射・同中書門下三品となる。

その後、褚遂良は高宗とあわず潭州都督に左遷される。顯慶二年（六五七）、桂州都督に転じ、さらに愛州（現在のベトナム北部）刺史に左遷され、翌顯慶三年、六三歳で没した。褚遂良は父の褚亮とともに太宗に愛重され、諫議大夫となつて

はしばしば諫奏して職責を尽くし、ついに後事の付託さえ受けた。高宗の信任も厚く、唐王朝に重きをなしたが、武昭儀冊立を戒めて、最晩年は不遇の中に過ごした。武昭儀冊立の結果は史実の示す通りで、遂良の憂いた通りとなった。彼の意思の強さ・忠誠は、父の褚亮より受け継ぎ、更に甚だしいものがあつた。

「3」、褚遂良の作品

褚遂良の作品は現在六つ確認されている。一、四が、行書体。二、三、五、六が、楷書体である。

- 1、枯樹賦（貞觀四年・六三〇）
 - 2、伊闕仏龕碑（貞觀十五年・六四一）
 - 3、孟法師碑（貞觀十六年・六四二）
 - 4、文皇哀冊（貞觀二十三年・六四九）
 - 5、房玄齡碑（永徽三年・六五二）
 - 6、雁塔聖教序（永徽四年・六五三）
- 他に、褚遂良の作品だと伝わるも五つを示す。

- 7、蘭亭序八柱本第二（臨摸）
- 8、汝南公主墓誌
- 9、倪寬贊
- 10、楷書千字文
- 11、行書千字文

「4」、孟法師碑について

○時代・年代、唐時代・貞観一六年（六四二）の建碑。

○書者揮毫年齢、褚遂良四七歳時。

○撰文、碑文は岑文本。

○建碑場所、孟法師が生涯住持した女道士至徳観の寺院内に建碑された。

○内容、道教における女道士（孟法師）の徳を頌する内容。

○原拓、孟法師碑の原拓は、一部のみ。いわゆる天下の孤本である。「李氏四方」（啓法寺碑・孔子廟堂碑・善才寺碑・孟法師碑）いずれも孤本（李宗瀚・清時代の収蔵家）の一つとして喧伝される。諸家の収蔵を経て、現在、日本の三井聴冰閣にて所蔵。小生、以前拝観したが、本誌拓の墨色は松煙墨を用いており、古拓の味わいが滲みでている。

○参考、原石は北宋末の頃、東隣の国子監に移され、その後いつの間にか失われたという。そのため拓本が少ない。碑文を読むと孟法師は江夏（湖北省）安陸の人で、俗名を孟静素という女道士である。隋時代の文帝（楊堅）に招かれ、公卿以下、帰依する者が多かったといわれる。

本論（理論、実験、調査の過程及び得られた結果など）

「孟法師碑を科学する（二）」

「第一章」

「書法編・孟法師碑からの筆意考証」の続き

「6」、「跳ね」の研究

「跳ね」（右方向）は、六つの筆意が確認できる。

図（Y）群の文字をみる。

「元」の文字を見る。第四画目の跳ね出しのように、開いた筆を静かに、上の方向へ押し上げながら閉じていったもの。
「既」の文字を見る。第一〇画目の跳ね出しのように、開いた筆を静かに、上の方向へ押し上げながら閉じていったもの。
「氣」の文字を見る。第四画目の跳ね出しのように、開いた筆を静かに、上の方向へ押し上げながら閉じていったもの。
「冠」の文字を見る。第六画目の跳ね出しのように、開いた筆を静かに、上の方向へ押し上げながら閉じていったもの。
「孔」の文字を見る。第四画目の跳ね出しのように、開いた筆を静かに、上の方向へ押し上げながら閉じていったもの。
「九」の文字を見る。第二画目の跳ね出しのように、たつぷりと開いた筆を静かに、上の方向へ押し上げながら閉じていったもの。

「託」の文字を見る。最終画の跳ね出しのように、左行きに開いた筆を静かに、上の方向へ押し上げながら閉じていったもの。
以上、跳ね出し部分で、開いた筆を静かに、上部方向へ押し上げながら閉じていったものが確認できる。

図（Z）群の文字をみる。

「戒」の文字を見る。第七画目の跳ね出しのように、跳ね出しの筆意は、図（Y）群と同じだが、押し出す方向が異なったもの。
「我」の文字を見る。第七画目の跳ね出しのように、跳ね出しの筆意は、図（Y）群と同じだが、押し出す方向が右上部四五度のもの。

「風」の文字を見る。第二画目の跳ね出しのように、跳ね出しの筆意は、図（Y）群と同じだが、押し出す方向が異なったもの。
「成」の文字を見る。第四画目の跳ね出しのように、跳ね出しの筆意は、図（Y）群と同じだが、押し出す方向が異なったもの。
「允」の文字を見る。第三画目の跳ね出しのように、跳ね出しの筆意は、図（Y）群と同じだが、押し出す方向が外に向かっ

たもの。

「観」の文字を見る。形意難しく、扁と旁が双方の姿勢で引き合っているように考える。第七画目の跳ね出しのように、跳ね出しの筆意は、図（Y）群と同じだが、押し出す方向が外に向かったもの。

「倪」の文字を見る。最終画の跳ね出しのように、跳ね出しの筆意は、図（Y）群と同じだが、押し出す方向が右上部四五度のもの。

以上、跳ね出しの筆意は、図（Y）群と同じだが、押し出す方向が異なったものが確認できる。

図（a）群の文字をみる。

「載」の文字を見る。第十一画目のように、段々開いてきた筆を、少しだけつり上げたもの。

「地」の文字を見る。最終画のように、段々開いてきた筆を、少しだけつり上げたもの。

「説」の文字を見る。最終画のように、段々開いてきた筆を、少しだけつり上げたもの。

「懿」の文字を見る。第二十画目のように、段々開いてきた筆を、当たった反動を利用して少しだけつり上げたもの。

「岱」の文字を見る。第四画目のように、段々開いてきた筆を、少しだけつり上げたもの。

「誠」の文字を見る。第十一画目のように、段々開いてきた筆を、少しだけつり上げたもの。

「戒」の文字を見る。第二画目のように、段々開いてきた筆を、少しだけつり上げたもの。

以上、段々開いてきた筆を、少しだけつり上げたものが確認できる。

図（b）群の文字をみる。

「兆」の文字を見る。最終画の跳ねのように、幅広く強く、そして短く跳ね出したもの。

「先」の文字を見る。最終画の跳ねのように、幅広く強く、そして短く跳ね出したもの。

「已」の文字を見る。第三画目の跳ねのように、幅広く強く、そして短く跳ね出したもの。

「既」の文字を見る。最終画の跳ねのように、幅広く強く、そして短く跳ね出したもの。
 「晃」の文字を見る。最終画の跳ねのように、幅広く強く、そして短く跳ね出したもの。
 「龍」の文字を見る。第十二画目の跳ねのように、幅広く強く、そして短く跳ね出したもの。
 以上、幅広く強く、そして短く跳ね出したものが確認できる。

図(c) 群の文字をみる。

「心」の文字を見る。第二画目の跳ねのように、次への点への意もあるが、跳ね出しを強く幅広くそして高くしたもの。
 「徳」の文字を見る。第十二画目の跳ねのように、次への点への意もあるが、跳ね出しを強く幅広くそして高くしたもの。
 「懸」の文字を見る。第十八画目の跳ねのように、次への点への意もあるが、跳ね出しを強く幅広くそして高くしたもの。
 「己」の文字を見る。第三画目の跳ねのように、跳ね出しを強く幅広くそして高くしたもの。
 「忘」の文字を見る。第五画目の跳ねのように、跳ね出しを強く幅広くそして高くしたもの。
 「志」の文字を見る。第五画目の跳ねのように、次への点への意もあるが、跳ね出しを強く幅広くそして高くしたもの。
 「思」の文字を見る。第七画目の跳ねのように、次への点への意もあるが、跳ね出しを強く幅広くそして高くしたもの。
 以上、跳ね出しを強く幅広くそして高くしたものが確認できる。

図(d) 群の文字をみる。

「徳」の文字を見る。第十二画目の跳ね出しのように、終りは筆を軽く拭き、短くハネ出しもの。
 「志」の文字を見る。第五画目の跳ね出しのように、終りは筆を軽く拭き、短くハネ出しもの。
 「絶」の文字を見る。最終画の跳ね出しのように、終りは筆を軽く拭き、短くハネ出しもの。
 「色」の文字を見る。最終画の跳ね出しのように、終りは筆を軽く拭き、短くハネ出しもの。
 以上、終りは筆を軽く拭き、短くハネ出しものが確認できる。

以上、「跳ね」（右方向）は、図（Y）ゝ 図（d）までの六つの筆意が確認できる。

「7」、「散水」の研究

「散水」は、孟法師碑独自の特殊な結体をとっている。

図（e）群の文字をみる。

「法」、「流」、「渤」、「漢」、「江」、「決」、「洞」等を見ると、散水の三点がきわめて強く、鋒がよく開いて深く入っていることが確認できる。第二画目を左へ思いつきり出している。そして、第三画目は、短く跳ね出している。「漢」、「洞」字以外のほとんどが、第三画目の入った筆を見せないのも特徴であると考ええる。

「8」、「冠」の研究

「冠」は、三つの筆意が確認できる。

図（f）群の文字をみる。

「究」の文字を見る。第二画目の点での軽い押さえを受け、第三画目の横への送り方、軽めに引いている。右角の跳ね方、開いた筆を小さく三角形にまとめている。

「寧」の文字を見る。第二画目の点での軽い押さえを受け、第三画目の横への送り方、軽めに引いている。右角の跳ね方、開いた筆を小さく三角形にまとめている。

「宙」の文字を見る。第一画目の点を強く、第二画目の点で開いた筆を受け、第三画目の横への送り方、軽めに引いている。右角の跳ね方、開いた筆を小さく三角形にまとめている。由の位置を右側特に寄せ、左側を広く空けているのが面白いと考える。

「宗」の文字を見る。第二画目の点での軽い押さえを受け、第三画目の横への送り方、軽めに引いている。右角の跳ね方、開いた筆を小さく三角形にまとめている。

「霞」の文字を見る。第二画目の点での軽い押さえを受け、第三画目の横への送り方、軽めに引いている。右角の跳ね方、開いた筆を小さく三角形にまとめている。

以上、第二画目を受け、第三画目の横への送り方、軽めに引いていき、右角の跳ね方、開いた筆を小さく三角形にまとめていることが確認できる。

図（g）群の文字をみる。

「窮」の文字を見る。第二画目の点、だんだん筆を開いている。それを受け、第三画目の横の送り方は側筆四五度のまま運んでいる。右角の折れ方は、図（f）群の文字等とは異なり、当たった筆をそのまま下ろしている。

「富」の文字を見る。第三画目の横の送り方は側筆四五度のまま運んでいる。右角の折れ方は、図（f）群の文字等とは異なり、当たった筆をそのまま下ろしている。

「宣」の文字を見る。第二画目の点、だんだん筆を開いている。それを受け、第三画目の横の送り方は側筆四五度のまま運んでいる。右角の折れ方は、図（f）群の文字等とは異なり、当たった筆をそのまま下ろしている。

「榮」の文字を見る。第九画目の点、だんだん筆を開いている。それを受け、第十画目の横の送り方は側筆四五度のまま運んでいる。右角の折れ方は、図（f）群の文字等とは異なり、当たった筆をそのまま下ろしている。

「靈」の文字を見る。第二画目の点、だんだん筆を開いている。それを受け、第三画目の横の送り方は側筆四五度のまま運んでいる。右角の折れ方は、図（f）群の文字等とは異なり、当たった筆をそのまま下ろしている。

「覆」の文字を見る。第二画目、だんだん筆を開いている。それを受け、第三画目の横の送り方は側筆四五度のまま運んでいる。右角の折れ方は、図（f）群の文字等とは異なり、当たった筆をそのまま下ろしている。

以上、冠の右角の折れ方が、図（f）群の文字等とは異なり、当たった筆をそのまま下ろしていることが確認できる。

図（h）群の文字をみる。

「霜」の文字を見る。第一画目を受け、第二画目では、開いた筆を静かに抜いている。

「雲」の文字を見る。第一画目、開いた筆を抜いている。それを受け、第二画目も左下部四五度方向に開いた筆を抜いている。

「碑」の文字を見る。第四画目や第七画目のように、普通に転じたもの。

以上、第一画目を受け、第二画目では、開いた筆を静かに抜いていることが確認できる。

以上、細かく吟味していくと、速さと力の変わり方により、自然と様々な形に変化が生じてくると考える。

「9」、「右肩転折部分」の研究

「転折」は、その古典が集約されている。よく検証することで、より特徴がつかめると考える。孟法師碑では、六つのパターンが確認できる。

図（i）群の文字をみる。

「碑」の文字を見る。石扁では、各画を離しているのでゆとりを感じさせるが、第四画目や第七画目のように、普通に転じたもの。

「巨」の文字を見る。構えがガツシリとしている。特に第三画目の「コ」の部分で強い印象を受ける。この第三画目のように、普通に転じたもの。

「民」の文字を見る。第一画目のように、普通に転じたもの。

「青」の文字を見る。第六画目や第七画目のように、普通に転じたもの。

「壊」の文字を見る。第七画目や第七画目のように、普通に転じたもの。

「如」の文字を見る。第五画目や第七画目のように、普通に転じたもの。

「謂」の文字を見る。第六画目や第九画目や第十四画目のように、普通に転じたもの。

以上、右肩転折部分で普通に転じたものが確認できる。

図（j）群の文字をみる。

「殉」の文字を見る。第六画目のように、肩を外にはずしたものの。

「楷」の文字を見る。第十画目のように、肩を外にはずしたものの。

「典」の文字を見る。第二画目のように、肩を外にはずしたものの。

「甫」の文字を見る。第三画目のように、肩を外にはずしたものの。

「東」の文字を見る。第三画目のように、肩を外にはずしたものの。

「賢」の文字を見る。第十一画目のように、肩を外にはずしたものの。

「門」の文字を見る。第六画目のように、肩を外にはずしたものの。

以上、右肩転折部分で肩を外にはずしたものが確認できる。

図（k）群の文字をみる。

「祠」の文字を見る。第六画目のように、角を表さずに軽く転じているもの。

「類」の文字を見る。第十三画目のように、角を表さずに軽く転じているもの。

「筍」の文字を見る。第八画目のように、角を表さずに軽く転じているもの。

「菌」の文字を見る。第六画目のように、角を表さずに軽く転じているもの。

「情」の文字を見る。第九画目のように、角を表さずに軽く転じているもの。

「恩」の文字を見る。第二画目のように、角を表さずに軽く転じているもの。

「體」の文字を見る。第十二画目のように、角を表さずに軽く転じているもの。
以上、右肩転折部分で角を表さずに軽く転じているものが確認できる。

図（１）群の文字をみる。

「而」の文字を見る。第四画目のように、行草のごとく更に、しなる様に丸く転じているもの。
「卿」の文字を見る。第八画目のように、行草のごとく丸く懷広く転じているもの。
「駕」の文字を見る。第十一画目のように、行草のごとく丸く転じているもの。
「鴻」の文字を見る。第十四画目のように、強く行草のごとく丸く転じているもの。
「高」の文字を見る。第八画目のように、行草のごとく丸く転じているもの。
「弱」の文字を見る。第三画目や第八画目のように、しなやかに行草のごとく丸く転じているもの。
「鳥」の文字を見る。第八画目のように、行草のごとく丸く転じているもの。

以上、右肩転折部分で行草のごとく丸く転じているものが確認できる。

図（m）群の文字をみる。

「也」の文字を見る。第一画目転折のように、鋒先が出て、角を表しているもの。
「物」の文字を見る。第六画目転折のように、鋒先が出て、角を表しているもの。
「気」の文字を見る。第四画目転折のように、鋒先が出て、角を表しているもの。
「為」の文字を見る。第三画目や第四画目の転折のように、鋒先が出て、角を表しているもの。
「戸」の文字を見る。第二画目転折のように、鋒先が出て、角を表しているもの。
「廼」の文字を見る。第三画目転折のように、鋒先が出て、角を表しているもの。
「也」の文字を見る。第一画目転折のように、鋒先が出て、角を表しているもの。

以上、右肩転折部分で鋒先が出て、角を表しているものが確認できる。

図 (n) 群の文字をみる。

「錫」の文字を見る。第十画目のように、筆を内側へ返しているもの。

「明」の文字を見る。第七画目のように、筆を内側へ返しているもの。

「閭」の文字を見る。第六画目のように、筆を内側へ返しているもの。

「丹」の文字を見る。第二画目のように、筆を内側へ返しているもの。

「徹」の文字を見る。第十画目のように、筆を内側へ返しているもの。

「固」の文字を見る。第二画目のように、筆を内側へ返しているもの。

以上、右肩転折部分で筆を内側へ返しているものが確認できる。

「転折」は、その古典が集約されていると考える。孟法師碑では、六つの筆意が確認できる。

「第二章」

「孟法師碑」と初唐の三大家（虞世南「孔子廟堂碑」・歐陽詢「九成宮醴泉銘」）との文字比較考証

唐時代（六一八～九〇七）は、楷書の完成期であると考え、美しい楷書を完成させるため、大家それぞれがどのように各々の領域を切り開いていくのか検証する。

(1)、虞世南「孔子廟堂碑（六二九前後）」・歐陽詢「九成宮醴泉銘（六三二）」・褚遂良・「孟法師碑（六四二）」との文字比較考証

図・「孟法師碑・九成宮醴泉銘・孔子廟堂碑」文字比較表 (1)、「之」の文字をみる。

「孔子廟堂碑」は、文字全体の姿、スマートで丸味を帯びている。結体も、ゆったりとくつろぎがある。最終画での払いでは、

筆を開く場面で止まらず、呼吸長くゆるやかに運んでいる。跳ねだしの長さは最も長い。

「九成宮醴泉銘」は、メリハリがある。第一画目の点、筆が一筆でパツと開いている。第二画目、起筆で開いた筆が少々右上がりに閉じていつている。第三画目、同じく開いた筆が閉じていき、最終画、パツと開いた筆がパツと閉じテキパキとした運びであるが、収筆が少々上向きにとっている。奇麗につくっている訳ではないが、清く健やかに放っている。跳ねだしの長さは中間である。

「孟法師碑」は、第一画目の点、様々な点の表情をみせている。第二画目の起筆の角度を厳しくし打ち込んでより深さを出している。結体も方正をとり、より重厚さ質朴さを高めている。払いでは、一気に筆を開き一気に筆を閉じ短い。跳ねだしの長さは最も短い。

図・「孟法師碑・九成宮醴泉銘・孔子廟堂碑」文字比較表(2)、「天」の文字をみる。

「孔子廟堂碑」は、文字全体の姿、スマートで丸味を帯びている。呼吸が長く、ゆったりとくつろいだ感じがする運びである。跳ねだしの角度は、いちばん水平気味である。

「九成宮醴泉銘」は、ひとつの上下の弾みを利用して、筆を運んでいる。第一画目・第二画目共に、起・収筆四五度で右上がり平面的に運んでいる。横画が二本並ぶが敢えて変化はない。第三画目、第一画目と離す例が多い。無駄を省いた運びをしている。左払いを軽く、右払いを強く力をしめている。跳ねだしの角度は中間である。

「孟法師碑」は、第一画目・第二画目の起筆の角度、さまざま確認できるが、より厳しく打ち込んで厚みを出している。結体も方正をとり、より重厚さ質朴さを高めている。第三画目は、第一画目と離す例が多いことが確認できる。第四画目は、第二画目の随分下で第三画目と接する例が多い。払い方は、一気に筆を開き一気に筆を閉じている。分厚い線でズングリとした運びで、払い出しも短くまとめている。跳ねだしの角度は、いちばん上向き気味である。

図・「孟法師碑・九成宮醴泉銘・孔子廟堂碑」文字比較表(3)、「於」の文字をみる。

「孔子廟堂碑」は、文字全体の姿、スマートで丸味を帯びている。結体も、ゆったりとくつろぎがある。線の引き方がいちばん緩やかである。

「九成宮醴泉銘」は、結体が左右せまっている。扁は「オ」に置き換えている。筆写体の通例。ひとつの上下の弾みを利用して、筆を運んでいる。第一画目、起・收筆四五度で多少右上がり平面的に運んでいる。第二画目、起・收筆四五度で收筆は、スット立ち上がるように開いた筆をまとめている。第四画目、非常に高く構えている。第六・七画目の点は、一筆でパツと鋒を開いている。

「孟法師碑」は、扁は、「方」・「オ」の両方確認できる。左払いをこんもりと粘つくく運んでいる。傍の点四画、筆脈の通貫性と重厚な変化が面白い。

図・「孟法師碑・九成宮醴泉銘・孔子廟堂碑」文字比較表(4)、雨冠をみる。

「孔子廟堂碑」は、文字全体の姿、丸味を帯びている。結体にくつろぎがある。第一画目、緩やかに引き、第二画目、外に力が張るように点を打ち、第三画目の横画、仰ぐように丸みを帯びた運び。折り返しの跳ねは、開いた筆が軽く角で当たって内側に向かい閉じている。点四つも軽やかに打っている。

「九成宮醴泉銘」は、第二画目、非常に高い位置から大きく落としている。第三画目の横画は長めにとっている例が多い。折り返しの跳ねは、開いた筆が角で当たった反動を利用し内側に、ごく自然に俊敏に閉じている。点四つの表情もほぼ一緒。軽く小さくそつ気なく書いている。

「孟法師碑」は、第三画目の折り返しは垂らす例もある。中を広く懐大きくしている。冠広く深い。隸書の名残だろうか、漢代書法へのつながりがより近いと考える。重心も、孟法師は安定しすぎるくらいに下にある。

図・「孟法師碑・九成宮醴泉銘・孔子廟堂碑」文字比較表(5)、門構えをみる。

「孔子廟堂碑」は、文字全体の姿、スマートで丸味を帯びている。第一画目、第二画目、第三画目とあけているのが特徴である。

風通しよくし、文字の中を広くみせる効果があると考え。

「九成宮醴泉銘」は、結体は、そびえ引き締まっている。くつつきすぎもせず、離れすぎもせず、用筆に無駄が無い。第一画目、二画目、三画目と、きっちりくつつける。

「孟法師碑」は、結体は、向勢で丸味があり、ズングリと重心が低い。第一画目、第二画目、第三画目とあけている。門構の中の空間は、左側を狭く右側を広くとっている。転折も孔子廟、九成宮と比較するとふっくらとしている。

以上、(虞・孔子廟)、(欧・九成宮)、(褚・孟法師)の三種を同字比較検証してみると、孔子廟、九成宮が縦長な感じにするのに対し、孟法師は方正でズングリどっしりとした構えをとっていることが確認できる。これが孟法師の最大の特長であると考え。それは、「重心が低い」という事にもつながる。その原因は、二つ考えられる。一つは、文字の重心が真中より少し下方にあること。二つは、横画の右上りが多少穏やかで、縦よりも横への線の伸び方が勝っていること。この二点が、重心を低く、どっしりと安定した構えになる原因であると考え。更に、それぞれの点画にも厚味があり、丸くモコモコとした感があるのも特徴の一つであると考え。虞世南(五五八―六三八)、欧陽詢(五五七―六四二)、褚遂良(五九六―六五八)と、褚の方が三七・八才、年下ということになるが、虞・欧の影響もかなり受けており、用筆法でも、共通する部分が少なくない。同時代の三大家たちとの文字比較検証をおこなうと、共通する部分もあるが、点画の組み方、重心等、全く傾向を異にしていることが確認できる。決められた楷書という枠の中で、それぞれが競い合い個性的な表現にまで高めていたと考える。

「第三章」

日本近代大家臨書考証

日本近代大家(丹羽海鶴・比田井天来・川谷尚亭)の臨書検証。

日本近代書道の幕開けは、明治一三年（一八八〇）の楊守敬（一八三九年～一九一五年・字は惺吾、号は鄰蘇。清時代末の学者）初代駐日公使の何如璋（清末の官僚・外交官）の随員となって来日。日本で、中国国内で既に散逸した古典籍の収集にあたった。来日時、携行した多数の碑版法帖を紹介し、また師・潘存から学んだ書法（廻腕法）を伝えた。この年の七月、巖谷一六・日下部鳴鶴・松田雪柯等の訪問を受けている。その際、孟法師碑の雙鉤本も持参しており、日下部鳴鶴がこれを木版に刻ってひろめ、「談書會誌」（談書会・明治四十年六月創立）にも紹介されている。楊は明治一七年五月まで五年間滞日する。その後、中国でも影印本がいくつか出版された。日本でも晩翠軒からコロタイプ本が出版され、複製が数種ある。楊守敬は、日本明治書壇に多大な影響をあたえた。このような経緯で孟法師碑は伝わるが、近代日本では孟法師碑がどのように受け止められているか。大家の臨書から検証する。

丹羽海鶴（文久三年（一八六四）十一月二十五日～昭和六年（一九三二）七月五日）は、岐阜県出身。本名は正長、幼名は金吾、字は寿郷。晩年には海雀とも書いた。日下部鳴鶴に師事。庄屋丹羽五兵衛の四男。幼少時より書に親しみ、飛驒の高山小学校で教鞭を執りながら書の研究を続けた。明治二十一年（一八八八年）八月、二十六歳時、日下部鳴鶴の来遊を機に入門。以後、後、上京、内弟子として七年積んだ。六朝・晋唐風を研究し、特に孟法師碑を髣髴させる作品を残している。海鶴の書風は書道教育界に受け入れられ、学習院教官、東京高等師範学校講師、文部省教員検定試験委員（習字科）などを歴任。昭和初期までの習字教科書の書風は顔法であったが、海鶴は書道教育の基準を初唐の楷書におくことを提唱。門下に鈴木翠軒、田代秋鶴、田中海庵等、数多くの門弟を輩出。昭和六年、六十七歳没。

丹羽海鶴臨

図8、丹羽海鶴の臨書は、「孟法師碑・丹羽海鶴臨」学書会刊行（昭和九年十月発行）から掲載した。海鶴がこの碑を好んで書かれたことは有名で、後の、川谷尚亭の「書の研究」等にも半紙二つ折で載る手本など、原帖を髣髴させるかの孟法

師碑の臨書を数種残している。

丹羽海鶴臨は、格調の高さでは群を抜いていると考える。細身であるが鋒を利かせ、呼吸をもたせるように書かれ、結構にゆとりがあるがある。それぞれの文字の転折部分では、横画の途中での変化を受けた独自の筆意が確認できる。無理に作らず力みすぎず、素直に運んでいるようだ。何よりも、運筆の呼吸で、暢びやかに余裕をもたせて書くことによって、各部分の空間にゆつたりとした膨らみとゆとりが出来てきていることを学ぶことが出来る。

比田井天来（明治五年（一八七二）一月二十三日～昭和十四年（一九三九）一月四日）、長野県出身。本名・鴻。幼名、常太郎。その活動は近代日本の書道界において新境地であったとされ、「現代書道の父」と称される。一八九二年上京。小石川哲学館で漢学を学び、日下部鳴鶴に師事。一八九八年二松学舎に転学し漢文を学ぶ。一九〇〇年、鴻と改名。一九〇一年、田中元子（小琴）と結婚。東京陸軍地方幼年学校習字科教授嘱託。一九一四年、鳴鶴「書勢」の経営を引き継ぐ。一九一五年 東京高等師範学校習字科講師。一九一六年、内閣教育検定委員会臨時委員。一九二七年、書学院を創設。東京美術学校講師。神奈川師範学校講師、一九三七年、大日本書道院創立、帝国芸術院会員。一九三九年、没。法号、書学院殿大誉万象居士。数多くの門人を輩出している。

比田井天来は、「学書筌蹄」（雄山閣刊）の中で、

「孟法師碑の拓本の今に存するもの、わずかに臨川李氏の所蔵一本となす。上海発行の臨川四種中の一つなり。東京晚翠軒の発行に係る唐拓孟法師碑と題するもこれなり。因宣堂法帖に全文をモ刻す。筆力純弱にして観るに足らず。文まあカビユウ多し。然れども、これに因りて建碑の年代及び褚遂良の書たるを知ることを得。褚書雁塔聖教序は唐永徽四年に建つる所にして、この碑は貞観十六年に造る所なり。雁塔に比すれば年を遡ること方に十一年、褚公四七歳の時の書なり。公の書この時未だ家法を成さず。故に聖教序の超妙に及ばずと雖も、却って初学者の模範となすに適するものあり。（部分抜粋）」と

ある。比田井天来の臨書は、自ら編集刊行した雑誌「書道春秋」に連載されたものや、「天来習作帖」等、数種ある。

図九は、「比田井天来臨孟法師碑（書学院出版部・昭和四十六年十月二十三日発行）」から掲載した。天来五十代半ばころの臨書と考えられるが、この後半続きの資料を大森書学院の高橋蒼石氏よりご提供いただいた。氏によると、この時の臨書は「孟法師碑臨本一十編」に分けられており、第一編が書籍となっている（一部分「書道春秋」より掲載）。第二編～第四編が個人蔵。第五編～第十編が横浜比田井家蔵。と教示いただいた。比田井南谷によるあとがきに、「天来は孟法師碑をたいへん好んで、壮年から晩年にいたる、何通もの臨書が残っており、平生初心者にこれを習うことをすすめ、わたくしたち子供にも、第一に習わせた。褚書の最高の傑作は、永徽四年、五十六歳の書になる雁塔聖教であることに異論はないが、四十六歳の向上期にある孟法師碑には、晩年のものより鋭い気迫が感ぜられるように思う。雁塔の渾融にたいして、これは、凛冽である。天来はこれを豪快な筆をもって臨し、原碑よりさらに厚味のあるものとした（部分）」と記している。

天来は、大正二年頃から剛毛側筆を使用した、古法による臨書を世に問おうとした活動をしており、形意共、写実に徹する態度が、よく確認できる。重厚な線質で孟法師の姿を損ねず、当たり前の書き方で、余計なことは一切していない。痛烈な筆力と圧倒的な気魄は天来独自のもの。このような天来の姿勢が、より真に迫った数々の臨書を残すことが出来たのだと考える。

川谷尚亭（明治十九年（一八八六）三月一日～昭和八年（一九三三）一月二十九日）。高知県出身。名は賢三郎。字大道。近藤雪竹に師事。1日に5合の墨と水を使う練磨を重ね、雪竹門下の麒麟児と囑目される。大正五年（一九一六）、高坂高等女子学校の教諭。同七年（一九一八）上京、三菱造船会社に入社。在京中に日下部鳴鶴、丹羽海鶴、比田井天来らの薫陶を受ける。同十三年甲子書道会を設立。「書之研究」創刊。以後没するまでの八年間、書の研究と普及に精力的に取り組む。昭和八年一月二十九日没。四八歳。著書に「書道史大観」等。

川谷尚亭は、「楷書楷梯」甲子書道会刊・昭和二年（一九二七）発行の中で、

「楊守敬いふ、方整和暢飛行絶跡皆規に應じ矩に入るより来るなり。伊闕佛龕碑に次いて若書きである。ただ褚の書は伊闕にしてもこれにしても慮歐の長い形にならずに扁平形目なっているは六朝の遺風を守つたまの目思ふ。そして何れも隸意があらはれている。この碑は簫散といつてゐる人もあるが凝遠古厚のもの目思ふ。がつしりして正莊な處は伊闕よりは更に深刻味を加へている。作目しては優れている目思ふ。但し學ぶには中々困難である。この筆致は中々出来ない。習ふならば調子を下げて臨書してもらはなければならぬ。余は廟堂碑はこの質のものであつて更に風神高いもの目思ふ。趙子昂の三門記はこの風である。」と述べてゐる。

図十、川谷尚亭の臨書は、「楷書楷梯」から抜粋した。尚亭自身、「楷書楷梯」中、（臨書の注意）として、「（イ）緩急が少ない。遅い位に鋒を練つて行く。（ロ）中鋒又は短鋒の強いものがよい。土佐紙へ人生一樂兼毫を半分足らす浸して書いてみた。矢張り筆腰がつかへて力が出ぬ。もつと浸すのがよいやうである。」と記している。形を重要視するという眼で見ると、よく似てないように見えるかもしれない。しかし、原本の要素をきちんと押さえ、原本以上に生きて見えると考える。

結語

「孟法師碑」一字一字の筆意考証を實踐臨書を通じおこなつてきた訳であるが、「孟法師碑」一本の線の中にもさまざまな表情があることが確認された。運筆時のスピードの変化と筆圧の変化によつて、様々に変化することが確認された。「運筆時のスピードと筆圧の変化」この二つの変化が互いに相組み合わさることによつて、一つのリズムが生まれてくる。褚遂良四七歳時の奥底に流れている一つのリズムが、褚の呼吸の長短や深淺となり、点画の大小や抑揚となつて表れてきていると

考える。しかし、平面上の動きだけでは形にならない（臨書にならない）ことは、ここ数年の講義でも言い続けていることである。問題はこの先、原帖からは肉眼で確認出来ないリズムや呼吸など立体的な動きを分析していくことである。平面と立体。この二つの動きをもつて、はじめて形となり書となつてくると考える。これまで分析した通り、「孟法師碑」の各文字の線をみると実に変化多様である。しかし、その呼吸に不自然なところがない。どの場面を臨書してみても、変化の限りがつくされている。運びの中に多少の遅速の変化があつても、それは害のない程度の遅速変化である。その遅速の変化を順に確認したどつていくと、流れが出来、リズムが生まれ、筆脈が通つてくる。このように、形意の理の裏側には、運びの理が隠されていることが確認された。それぞれの文字の中身の構造とその受け応えが重要で、平面上の動きだけでは形にならない（臨書にならない）ことが確かめられた。

「褚遂良・孟法師碑」には、通貫した正しい調子がある。形意の理の裏側には、運びの理が横たわっていることが示唆された。又、日本近代大家の臨書考証では、それぞれの大家臨書から、その裏側には筆意を柱とすることが示唆された。

註

- （1）、写真版「孔子廟堂碑・九成宮醴泉銘・孟法師碑」は、雄山閣「書道基本名品集」より掲載。
- （2）、丹羽海鶴臨孟法師碑は、「孟法師碑銘附丹羽海鶴臨・学書会刊（昭和九年発行）より掲載
- （3）、比田井天来臨孟法師碑は、「比田井天来臨孟法師碑・書学院出版部刊（昭和四十六年発行）」より掲載
- （4）、川谷尚亭臨孟法師碑は、「楷書楷梯・甲子書道会刊（昭和二年発行）」より掲載

参考文献

書道全集（平凡社）、書芸術全集（雄山閣）、中国書道事典（雄山閣）、中国書道辞典（木耳社）、中国書道文化辞典（柳原出版）、文物（文物出版社）、中国法書ガイド（二玄社）、中国書論大系（二玄社）、書籍名品叢刊（二玄社）、書宗院報（書宗院）、書宗院研究会報（書宗院研究会）、書道基本名品集（雄山閣）、書品（東洋書道協会）、テキストシリーズ（天来書院）、孟法師碑・丹羽海鶴臨（学書会刊行）、比田井天来臨孟法師碑（書学院出版部）、比田井天来臨書精選（書玄）、天来習作帖（雄山閣）、学書筌蹄（雄山閣）、楷書楷梯（甲子書道会）他。

     	      	      	      
b	a	Z	Y

「孟法師碑」筆意比較表（8）

			
			
			
			
			
			
			
f	e	d	c

      	      	   	      
j	i	h	g

錫	也	帝	祠
明	物	卿	類
閨	氣	駕	箭
丹	為	鴻	菌
徹	戶	高	情
固	迺	弱	恩
	也	鳥	體



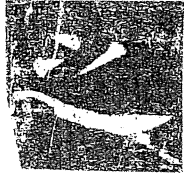











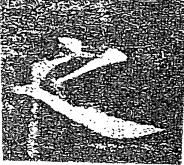



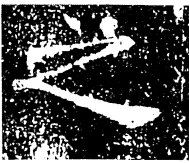





n

m

l

k

「孟法師碑」・「九成宮醴泉銘」・「孔子廟堂碑」文字比較表（1）


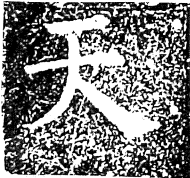








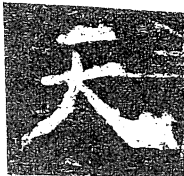
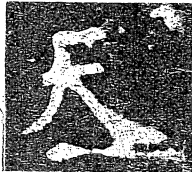





			
			
			
			
			
			
			
			


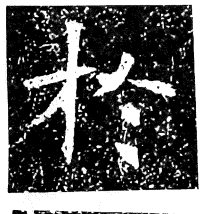




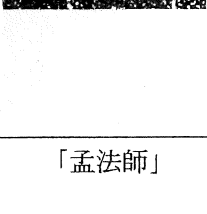




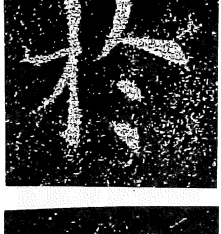
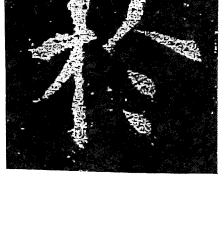
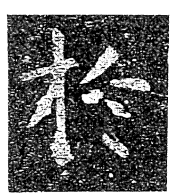
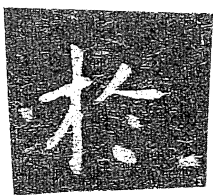
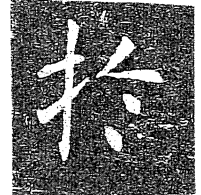




「孟法師」

「九成宮」

「孔子廟」

「孟法師碑」・「九成宮醴泉銘」・「孔子廟堂碑」文字比較表（2）

	     	   	      
	「孟法師」	「九成宮」	「孔子廟」



















	      	     	      
--	--	---	--

「孟法師」

「九成宮」

「孔子廟」

「孟法師碑」・「九成宮醴泉銘」・「孔子廟堂碑」文字比較表（4）

「孟法師」

「九成宮」

「孔子廟」

「孟法師碑」・「九成宮醴泉銘」・「孔子廟堂碑」 文字比較表 (5)

「孟法師」

「九成宮」

「孔子廟」

図十一・丹羽海鶴臨孟法師碑

孟法師

碑銘

觀夫太

陽始旦

「孟法師碑銘附丹羽海鶴臨・学書会刊（昭和九年発行）より掲載

図十二・比田井天来臨孟法師碑

孟法

銘

師碑

觀夫

図十三・川谷尚亭臨孟法師碑

廣開衆妙懸明鏡於
講肆陳鴻鍾於靈壇
著錄之侶升堂者比